

廣田幸稔先生の《砧》に寄せて

—三年の秋の夢ならば—

梶山女学園大学教授 飯塚 恵理人

廣田幸稔先生が《砧》(注二)を演じられる。《砧》の見どころが「砧之段」であることは疑いない。シテ妻を演じる能楽師が、漢詩や和歌の晩秋の景物である砧の世界、すなわち美しい秋の夜の景色の中、夫を思慕して再会を祈りながら夫に送る衣を搗つという寂しくも清澄で切ない世界をどのように上品に美しく表現するかに注目したい。

一 蘇武の妻—シテ妻の理想—

《砧》では蘇武の妻が搗つ砧の音が蘇武に聞こえたという故事が語られるが、これは『和漢朗詠集私注』にある「二四一 織錦機中已弁相思之字 搗衣砧上俄添怨別之声」の注「蘇武胡地久居以不販其妻每秋搗衣為以待」(注三)によるだろう。夫を待ち続けて砧を搗つ蘇武の妻のもとへ、時間はかかったが夫は帰ってきた。《砧》のシテ妻にとって蘇武と妻の関係は理想である。

さらに《砧》後場では「蘇武は旅雁に文を附け。萬里の南国に到りしも。契りの深き志。浅からざりし故ぞかし」、すなわち蘇武が旅雁に文を附して自分の生存を南方の中国(にいる妻)に知らせることができたのは、蘇武が自分の妻との契りを深く思い

大切にしていた故であるとシテ妻が語る。「砧で衣を搗つ・搗衣」という言葉には、『千載和歌集』巻第五の「秋歌下 三三九番 堀河院御時、百首歌たてまつりける時、搗衣のころをよみ侍りける 大納言公実 恋ひつつやいもがうつらむから衣きぬたのおとのそらになるまで」(注三)にあるように、「砧を搗つ妻が夫のことを思っているのと同じく、夫も妻のことを思っている」という意味も含まれているのが「本意」「こころ」である。

シテ妻は、自分も蘇武の妻と同様に砧を搗つたのに「君いかなれば旅枕夜寒の衣うつ、とも。夢ともせめてなど思ひ知らずや恨めしや」と、夫が妻を思う気持ちを持っていないことが砧の「本意」と異なり、自分の気持が夫に伝わらないことを悲しみ恨んで責める。このシテ妻のワキ夫に対する怒りと恨みを、どのように謡と所作によって能という詩劇らしく上品で切なく表現するかに注目したい。

二 「三年」という時間

夫の不在期間がこの秋で丸三年となる。それが妻が待てる限界であり、それを越えようと侍女から知らされた時、妻は死んで

しまう。天野文雄氏^{〔註四〕}は『砧』の妻が「三年の秋」にこだわるのは、『令』が規定しているような再嫁についての慣習あるいは慣習法が室町時代に存在していて、夫が三年間帰って来なかつたことを、妻は夫の裏切りと受けとめたのではないかというのが、この点についての筆者の理解なのである」と説明された。「令」は「律令」の令で、七〜八世紀頃の古代日本国家で定められた法律のうち、刑法（律）以外の法律を指す。天野氏は令の中に夫が長く不在の場合、妻が再婚できる規定があることを示し、『砧』の妻には再嫁の意志などなく、その点は令の再嫁の規定とは異なる」と前置きしながら、「三年経つたら再婚できる」という部分の慣習化の可能性について言及している。天野氏は未確認とされるが、そのような慣習があれば、それに基づきシテ妻が「三年経つたら夫は私と別れて再婚し、私は捨てられる」と考えたのだと言えよう。

天野氏はまた、この令の規定が文学作品に影響を与えた例として『伊勢物語』の第二十四段^{〔註五〕}を挙げ、田口和夫氏も同様の指摘をされたと述べている。この段は、宮仕えのため（都に）行つたまま三年間帰って来ない男を待ちわびた女が、大変熱心に言い寄っていた別の男にとつとう「今夜、お逢いします（＝結婚しましょう）」と約束してしまふ。ところがその日に昔の男が帰ってくる。女は男に和歌を詠み、その意味を理解した男は身を引いて女のもとを去る。あきらめきれない女は男を追いかけたが追い

つげず「そこにいたづらにな」という悲劇の話である。「いたづらになる」は古来、注釈書により様々な意味に取られているが、「死んでしまった」とするのが一般的である。『砧』のシテ妻の造型には「愛する男を三年以上待てなくて、それが原因となり死んだ」『伊勢物語』二十四段の女の受容が見られると考えてよいと思われる。

三 侍女夕霧の設定

ツレ夕霧は、侍女でありながら主人筋であるシテ妻に砧を用意する際に「悲しやな砧などは賤しき者の業にてこそ候へ」と批判とも受け取れる言葉を述べる。さらにシテ妻に「いかに申し候。只今都より御使下り。殿はこの年の暮にも御下りあるまじいて候」という言葉を告げ、妻の死を引き起こしている。堂本正樹氏は「夕霧という女は、当時の習慣では夫の都にいる間の性的パートナーであろう。身分は召し使いとはいえ、本妻から見ればライバルでもありました」^{〔註六〕}と言われた。この夕霧を京における夫の愛人とみなす説は、今も研究者や能楽愛好者に根強く支持されていると思う。しかし筆者は、単に「夕霧」という言葉が和歌の世界では砧と同じ晩秋の景物であり、『玉葉和歌集』巻第五の「秋歌下 七五四番 霧中搦衣を藤原隆信朝臣 夕ぎりに道はまどひぬ衣うつおとにつきて

や宿をからまし」(注七)とあるように、歌題「霧中擣衣」になるほ
どに「砧」と親和性があるからツレの名にしたと考える。「悲し
やな砧などは賤しき者の業にてこそ候へ」と言うのも、『玉葉
和歌集』巻第五の「秋歌下 七六三番 千五百番歌合に 醍醐
入道前太政大臣 衣うつしづがふせやのいたまあらみきぬたの
うへに月もりにけり」(注八)とあるように、和歌の世界で砧を擣
つのは風雅ではあるが貧しい庶民であるので、夕霧は妻が砧を
擣つのを止めようとしたのだろう。

シテ妻とツレ夕霧が一緒に砧を擣つのは世阿弥の造型である。

『和漢朗詠集私注』の「三四九 風底香飛双袖拳 月前杵怨両眉低
擣衣詩 後中書王」の注に「人相對擣衣故曰双袖拳両眉低 (二
人で向かい合つて衣を擣つから、双つの袖を挙げて(=それぞれ
の腕を挙げて)、両方の眉を低くする(=それぞれ顔を伏せる)
というのである)」(注九)とあるのを踏まえているのであろう。
妻と侍女が相對して衣を擣つ。まさに私注が記す意味での「双袖
拳両眉低」場面が舞台に表現されている。侍女を相手に砧を擣つ
妻の姿のほうが、一人で砧を擣つ姿よりも孤獨の侘しさと内面の
孤独を表現できると世阿弥は考えたのだろう。

四 名古屋における金剛流《砧》の上演と金剛謹之輔の《砧》録音

名古屋において金剛流の《砧》が演じられた最も古い番組を、

相山女学園大学能楽番組データベースにより検索すると、
昭和十六年十月五日の「金剛巖・田鍋惣太郎主催能」(布池町の名
古屋能楽堂)における「能《砧》 杵之出》シテ…金剛巖、シテツレ…
金剛勲、ワキ…西村弘敬、笛…藤田六郎兵衛、小鼓…田鍋惣太郎、
大鼓…谷口幸治郎、アイ…香島宗六」が該当した。この催しは初世
金剛巖と田鍋惣太郎の連名での主催であるが、この当時、名古屋
能楽界を実質的に切り回していた田鍋惣太郎がシテの金剛巖を
京都から招いて行つた催しであると考えて差し支えないと思う。
この時期の名古屋の金剛流は尾崎浪音の引退後の内紛等もあり、
人数が少なかった。戦時体制下であつたこの頃、地方の公演で
シテを勤めるのは宗家ないしその家の者で、弟子家は地謡として
参加し、それで着実に力を付けていった。この番組では地割を
確認できないが、廣田家の廣田晋一が宗家の信頼を得て地頭
などを勤めていた頃なので、彼が入っていた可能性もあると
考えている。

《砧》は、金剛流においても能よりは素謡で人氣があつたらし
い。先の番組より古い大正五年十一月二十三日の「立太子礼奉祝
弁才天祭典 金剛流謡会」(尾崎浪音宅)に「素謡《砧》シテ…大野
竹次郎、ワキ…大脇水甫」が出ている。寺田左門治の晩年から大正
年間いっぱい尾崎浪音門下の松風社の栄えた時期であり、名古
屋において金剛流謡曲を嗜む愛好者が多かつた時期である。

明治から大正にかけて活躍した金剛謹之輔は、後の初世金剛

巖とともに《砧》の砧之段の録音を残している。これは現在インターネットのYouTube配信で聴くことができるが、元々は片面三分弱しか録音できない機械式吹き込みの蓄音機レコードである。当時のレコードは高価なので、多くの弟子を持つ宗家クラスでさえも、自らが得意とする曲の聴き所の録音しか発売することはできなかったから、謹之輔が砧之段を得意としていたことが伺える。この盤を名古屋の謡曲愛好家が所有していたことを筆者は確認しているので、名古屋でも広く鑑賞されたと考えてよい。未熟な録音技術のため雑音が多いが謹之輔の名吟が偲ばれ、インターネットが使える方は「金剛謹之輔 砧之段」で検索の上、是非とも聴いていただきたい。

以上、《砧》について述べてきた。金剛流の《砧》は漢詩や和歌の世界で定められている砧の姿に基づき、砧を搗つても恋しい夫に逢えないことを恨みつつ偲ぶという詩劇の世界を美しく舞台化していると思う。廣田幸稔先生がこのシテ妻の切なくも清澄な寂しさをツレタ霧と共に美しく表現して下さることを期待している。

注

- 一 《砧》の詞章は金剛流現行謡本に拠った
- 二 『和漢朗詠集私注』山内潤三・木村晟・枋尾武編、新典社叢書10、新典社、一九八二年四月発行、一四〇頁上段
- 三 『新編 国家大観 第一巻』勅撰集編 歌集、「新編国家大観」編集委員会編、角川書店、一九八三年二月発行、一九二頁
- 四 天野文雄『《砧》の三年の秋』とその背景 ―『戸令』の「再嫁」規定などをめぐって―「第四回 廣田鑑賞会誌 パンフレット」廣田鑑賞会、二〇〇五年五月発行、八―十頁
- 五 『伊勢物語全評釈』古注釈 十一種集成』竹岡正夫著、右文書院、一九八七年四月発行、五三五―五五六頁
- 六 『世阿弥の能』堂本正樹著、新潮選書、新潮社、一九九七年七月発行、一七一頁
- 七 注三 四三六頁
- 八 同注七
- 九 注二 一四七頁上段

《砧》砧之段の録音
YouTube 配信アドレス

<https://www.youtube.com/watch?v=280BWqd4N1k>